# 『虞美人草』運命の池は『猫』にあり

Junko Higasa

漱石がロンドン留学中に書いた以下の断片の「魚」とは「己」である。

> ○池ガアルカイ
> アヽ有ルョ、魚ガ居るか居ないか受合わないが池は慥かにあるよ

そしてそれは以下の『虞美人草』第十一章につながる。

> 運命は丸い池を作る。池を回(めぐ)るものはどこかで落ち合わねばならぬ。落ち合って知らぬ顔で行くものは幸(さいわい)である。人の海の湧き返る薄黒い倫敦(ロンドン)で、朝な夕なに回り合わんと心掛ける甲斐もなく、眼を皿に、足を棒に、尋ねあぐんだ当人は、ただ一重の壁に遮られて隣りの家に煤けた空を眺めている。それでも逢えぬ、一生逢えぬ、骨が舎利になって、墓に草が生えるまで逢う事が出来ぬかも知れぬと書いた人がある。

これらの意味は『吾輩は猫である』第十一章の以下の文に見つける事が出来る。

> ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心の中(うち)で喧嘩を買いながら行き違う。それだけ個人が強くなった。
>
> 二六時中キョトキョト、コソコソして墓に入(い)るまで一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の呪詛だ。馬鹿々々しい。
>
> 昔しの人は己れを忘れろと教えたものだ。今の人は己れを忘れるなと教えるからまるで違う。二六時中己れという意識を以て充満している。それだから二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が薬だといって己れを忘れるより薬なことはない。
>
> 今の人の自尊心というのは自己と他人の間に截然(せつぜん)たる利害の鴻溝(こうこう)があるという事を知り過ぎているという事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むに従って一日々々と鋭敏になって行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないようになる。

二十世紀の世の中で、腹の中で自己を主張しながら知らぬ顔で行き違える「文明の民」は幸である。そういう人々が行き交う倫敦で「己を忘れるな」という二十世紀文明社会の「個性」を尋ねあぐんだ漱石は、「己を忘れろ」という昔の人の教えの壁に遮られて、墓に入るまで文明の民のような「自己」に逢う事が出来ないかもしれないと思う。何故ならその「個性の発展」がもたらす未来が予見できるからである。　(2014.9.7)